

歌唱教材としてのヒット曲で養う高校生への「感性」 —「ファルセット」による声色の知覚とその「仕掛け」による感受

尾崎 祐司*・太田 綾希**

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究の目的は、教科書に掲載されるヒット曲の音楽的要素によって、高校生の「感性」がどのように養われるか、その学習過程を明らかにすることである。平成25年度入学生から改訂高等学校学習指導要領が適用された。芸術科<音楽I>においては「A 表現(1)歌唱」で、「イメージをもって歌う」など生徒の内的経験を表出する学習過程が明記された。そして、「要素を知覚し、それらの働きを感受して」と「要素」の知覚も4番目の項目に明記された。

そこで、筆者らはファルセットが使用されているヒット曲を歌唱教材にした授業を行った。ヒット曲で使用されるファルセットは、聴き手に「やさしい」「穏やか」といった精神的に緩和する印象を与える。結果として、授業の展開に「思考・判断」する場面を導入すると生徒はファルセットを強く意識し、筆者らは生徒の感性が高まることを明らかにすることができた。

KEY WORDS

High school Art subject “music” 高等学校芸術科<音楽> Hit songs ヒット曲
falsetto ファルセット Musical thought 音楽的思考 “Device” of the hits ヒットの「仕掛け」

1 はじめに

平成25年度入学生から改訂高等学校学習指導要領が適用されている。芸術科<音楽I>においては「1 目標」に「音楽を愛好する心情」に「生涯にわたり音楽を愛好する心情」と「生涯学習社会の一層の進展に対応して、生涯にわたって音楽への永続的な愛好心をはぐくんでいくことを重視」⁽¹⁾した表記に改訂された。すなわち、高等学校で学習する必修科目の音楽Iは、生徒によっては学校という場で学習する最後の音楽学習であり、高校卒業後も音楽が生活の潤いとなるよう指導することが期待されている。

また、その目標に従って芸術科<音楽I>の「A 表現(1)歌唱」では、「イメージをもって歌う」など生徒の内的経験⁽²⁾を表出する学習過程が明記された。そして、以下のように「要素を知覚し、それらの働きを感受して」と小中学校の〔共通事項〕に相当する「要素」の知覚も4番目の項目に明記された。⁽³⁾

- ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。
- イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。
- ウ 様々な表現形態による歌唱の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。
- エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

本研究で問題としたいのは、高等学校の教科書に掲載されている日本のヒット曲で養う高校生への「感性」についてである。教科書にメディアを通じてヒットした曲が掲載されるようになったのは、平成元年告示の高等学校学習指導要領(平成6年4月施行)からである。当時は「ヒット曲」とカテゴライズされ、教科書への採用が「話題」として新聞報道されている。この記事の見出しは『メディア「高校教科書柔らかに変身」』とされ、「移り気な高校生の心をつかもうと(中略)出版社側も知恵をしぼった」⁽⁴⁾としている。これ以降、芸術科音楽の教科書に「ヒット曲」が掲載され現在に至っていることは、先行研究⁽⁵⁾で述べたとおりである。しかし、ヒット曲が教科書に教材曲として採用されて以降、その教材曲から何を感じ取らせようというのか不明確さが否めない。つまり、高校生という思春期の感性に訴えかけられる「要素」を何に設定し、その要素を知覚することで何を感受させようというのか。「エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと」の授業展開から「感性を高める」⁽⁶⁾教科の目標は

*芸術・体育教育学系 **上越教育大学(修士課程)

どのような過程で達成することにつながるのか。このような問題意識のもとに「声」の教材化と実践研究による考察を本論で展開する。

2 研究の内容

2.1 ヒット曲における「声」の知覚

本研究の方法として対象とするヒット曲の「要素」を設定する必要がある。そもそもヒット曲とは聴き手の心理に何らかの共感を得られることを目的に作られる「商品」である。「商品」であるからこそ売れるための「仕掛け」が仕込まれており、その「仕掛け」を「要素」と捉え、知覚・感受する授業を構成する。ヒット曲の「仕掛け」については、渡邊健一（1995）⁽⁷⁾、山下邦彦（2000）⁽⁸⁾、等でコード進行、和音の構造及びリズムなど形式的な側面から分析を行っている。実際、荒井由美作曲「卒業写真」などのコード進行⁽⁹⁾などが「仕掛け」のある事例として解説され、かつ教科書に掲載されている曲である。

しかし、いわゆる西洋古典音楽では重視されない「歌」としての要素、すなわちマイクロフォンを通じた歌手の声色や、歌詞の内容や発音よりも歌手の声質そのものを「サウンド」⁽¹⁰⁾として捉える「発声の特徴」は、指導事項としてどれだけ重視されているだろうか¹⁾。高等学校学習指導要領の芸術科「音楽Ⅰ」「歌唱」の指導事項においても具体的な発声の技法については触れていない。実際、歴代の高等学校学習指導要領には表1のように表記されてきた。

表1 「発声」に関する表記

告示年	表記の変遷
昭和33年	正しい発声や発音の技術
昭和45年	正しい発声と発音
昭和53年	発声の基本
平成元年	発声の基本
平成10年	曲種に応じた発声の工夫
平成21年	曲種に応じた発声の特徴を生かし

表1のとおり、「発声」がどのような性質をもったものかは定義されていない。言うならば、昭和33年告示から平成元年告示の小学校学習指導要領まで表記されていた「頭声的発声」が「正しい」発声で「基本」だったと考えられる。一方、平成10年告示では「日本の伝統音楽」や「世界の諸民族の音楽」の教材化によって、発声についても「頭声的発声」に限らないことが前提となった。すなわち、「正しい」という価値観が曲種によって異なることによる対応である。しかし、平成10年告示以降の「曲種に応じた発声」はヒット曲の歌手の個性をどれだけ重視しているのかいささか疑問が残る。サイモン・フリスによると「ポップソングが聴かれるとき、われわれは実際には同時に三つの意味の水準を聴くことになる」⁽¹¹⁾と述べている。その三つとして、「歌詞」「レトリック」そして「声」を彼は挙げている。すなわち、「声」は「ポップの歌手はその声事態が独自の意味作用をもたらす。同じ歌を違う歌手が歌うとき、両者の意味は明らかに異なる」と声はポップの文脈ではそれ自体が個人を指し示す⁽¹²⁾、と西洋古典音楽の発声の概念との違いがあることを指摘している。このように考えると、ヒット曲を教材とする際に「声」の性質を「要素」とすることは、「感性を高める」目標を果たせられる可能性を秘めていると考えられる。

2.2 「ファルセット」の概念

実際の授業を計画するにあたり、ヒット曲における「声」の性質から何を「要素」として授業を構成するか計画しなければならない。そこで、音楽プロデューサーの亀田誠治がJ-POPのヒット曲を分析するテレビ番組『亀田音楽専門学校』（NHK Eテレ 2013年12月12日放送）の第10回「胸熱のファルセット美学」を参考に授業を計画した。亀田はヒット曲の分析のテーマの一つに「ファルセット」の効果を探り上げている。しかし、亀田が使用している「ファルセット」の概念は、高橋による先行研究²⁾の規定とは異なる。高橋は表2のとおり規定している。

高橋は「ファルセット」とは男性のテノール歌手に限定された概念で、女性はその技法を用いる声域は「笛声 whistle register」として区別している。限定する理由として「16世紀にローマ教皇が人前における女性の演奏を禁止したことから、ソプラノ及びアルトのパートは、少年やスペインから入ったファルセット歌手が演奏していた。し

表2 高橋によるファルセットの概念⁽¹³⁾

性別	男声
声区	最も高い声区
声質	自然な声natural voiceから変わったbreak軽い声
パートによるファルセットの使用範囲	テノール-音域の非常に高い音を歌う時 男性アルト-アルトの音域を歌う時(全部あるいは一部分) 男性ソプラノ
芸術的意味	バロックや古典時代は、宗教音楽やオペラで重要な地位にあった男性アルトあるいは男性ソプラノの発声法。現代は、当時の曲を演奏するときに、効果的に使用される芸術歌唱の発声法。
発声技法としての意味	歴史的には、声区の融合によって低音部でも頭声やファルセットを、高音部でも胸声を響かせ、中間声域の色合いや力が一定となるよう訓練した。また、男声高声部においてはどの音域でどの程度ファルセットを使用するかによって、その名称が異なっていた。これらの発声技法をファルセットの声区としての概念に組み込もうとしたことにより、混乱。

かし、精巧な技術を要求するポリフォニー音楽の発展や少年の音量不足、変声の問題があって、大人の男性が受け持つようになった。つまりファルセットは、バスやバリトンが女声を模倣することを可能にするという意味の用語であり、偽りの、見せかけの、仮の声false voiceだったと考えられる⁽¹⁴⁾としている。

一方、亀田は番組の中で、「実はファルセットとはただの高い声ではなく、地声の下地になる声の成分のことで、地声はある高さの領域まで行くと出づらくなるというのが、その時残った声がファルセット(裏声)なのだ」と説明している。筆者はこの説明には、2つのパラダイムシフトがあるのではないかと捉えている。まず、1つ目はテレビ番組で「ファルセット」が「裏声」と同義と扱うことによって、視聴者に普遍的な認識として強化されることである。2つ目は、ヒット曲は西洋古典音楽ではないため女声を模倣する男声による高い「仮の声」、としてではなく「柔らかい」という声の性質にのみ着目した発声の概念として使っている。実際、亀田は「ファルセット」が使われている曲の事例として、小坂明子の「あなた」(1973)、一青窈の「もらい泣き」(2002)など女性が歌う曲も取り上げている。その他、ファルセットが使われている曲の事例は表3のとおりである。スキマスイッチ、Mr.Children、スピッツ以外が女性ボーカルであることから男声に限らないことが分かる。

表3 ファルセットが使われている曲の事例(下線がファルセットで歌われている部分)

『三日月』 絢香
君がいない夜だって そうno more <u>cry</u> もう泣かないよ 頑張っているからねって 強くなるからねって 君もみているだろう この消えそうな三日月 繋がっているからねって 愛してるからねって
『ふれて未来を』 スキマスイッチ
揺れていたたいよ これを忘れてはいけけないのだ <u>ふれてみたいよ</u> それはまだ早い?その前にやるのが山積み
『雪の華』 中島美嘉
今年最初の雪の華を ふたり寄り添って 眺めているこの瞬間(とき)に 幸せがあふれだす <u>甘えとか弱さじゃない</u> ただ君を愛している 心からそう思った
『Good-bye days』 YUI
oh Good-bye days いま 変わる気がする 昨日までに so long かつこ良くない 優しさがそばにあるから ~with you
『HERO』 Mr.Children
小さいころに身振り手振りを 真似てみせた 憧れになろうだなんて大それた気持ちはない でもヒーローになりたいただ一人君にとっての つまずいたり転んだりするようなら そっと手を差し伸べるよ
『ロビンソン』 スピッツ

誰も触れない 二人だけの国 君の手を離さぬように 大きな力で 空に浮かべたら <u>ルララ</u> 宇宙の風に乗る
『Everything』 MISIA
You're everything You're everything あなたが <u>想</u> より強く 優しい嘘なら <u>いら</u> ない 欲しいのはあなた
『Jupiter』 平原綾香
Every day I listen to my heart ひとりじゃない 深い胸の奥で つながってる 果てしない時を超えて 輝く星が 出会えた <u>奇跡</u> 教えてくれる Every day I listen to my <u>heart</u> ひとりじゃない この宇宙の御胸に <u>抱</u> かれて
『もらい泣き』 一青窈
ええい <u>ああ</u> 君から「もらい泣き」 ほろり・ほろり ふたりぼっち ええい <u>ああ</u> 僕にも「もらい泣き」 やさしい・の・は 誰です
『366日』 HY
恐いくらい 覚えているの あなたの匂いや しぐさや 全てを おかしいでしょう？ そう言って笑ってよ 別れているのにあなたのことばかり 恋がこんなに苦しいなんて 恋がこんなに悲しいなんて 思わなかったの 本気であなたを <u>思</u> って <u>知</u> った

すなわち、高橋の研究は西洋古典を歌うための「ベル・カント唱法」が前提である。そのため、「ファルセット」とは「仮の声」であり、できるだけ頭声化すべき訓練を行う声区概念として考えられている。この考え方は大城の研究においても明確である。「発声訓練における高音域のファルセットの機能を、低音域の胸声区とどのような方法で頭声化を完成させるか」⁽¹⁵⁾と頭声化への訓練方法の開発によって「高音域から低音域までが、滑らかで美しい声で歌える『ベル・カント唱法』の技法が達成されるようになる」⁽¹⁶⁾としている。すなわち、ヒット曲で求める「柔らかい」声質を個性的に歌うための技法とは捉えられていないのである。

このように、西洋古典とヒット曲との歌い方とで「ファルセット」を使用する目的が異なる。ちなみに、高橋が調査した辞書リストに加えていない平凡社『音楽大辞典 第4巻』（1982）によると、「ファルセットとは、頭声を用いる通常の高声区よりもいっそう高い声を得る技法で、声域の拡大や音色的な効果のために用いられる。ファルセットと地声をひんばんに交代させるアルプス地方のヨーデル、青森県の津軽民謡<ホーハイ節>がこれに属する」⁽¹⁷⁾と民俗音楽の発声を事例に挙げて定義付けられている。この定義はヨーデルの歌い手が男性に限らず女性も「ファルセット」を使うことから亀田の認識に近いと言えよう。

したがって、本論で使用する「ファルセット」の定義は、平凡社『音楽大辞典 第4巻』のものを用いる。

3 研究の方法

研究の方法は、新潟県立柏崎総合高等学校「音楽Ⅰ」履修者73名に対し、「さくら（独唱）」作詞：森山直太朗，御徒町風 作曲：森山直太朗 歌：森山直太朗⁽¹⁸⁾を教材曲とした鑑賞と歌唱の授業を各1時間ずつ合計2時間実践した。実践後に「意識」「判別」「歌詞との関係」「思考・判断」「学習充足感」の5項目、及び自由回答1項目についてアンケート調査を実施した。回答は質問1～質問5「意識」「判別」「歌詞との関係」「思考・判断」「学習充足感」について満足度の高い順から5段階で降順の選択形式である。回答結果から「学習充足感」と「意識」「判別」「歌詞との関係」「思考・判断」の4変数との関係について重回帰分析を行った。その分析結果とワークシートへの記述から高校生がファルセットによる声色を知覚することで、どのような文脈で感性が養われるのか考察する。また、質問6は授業全体に対する自由記述である。

授業者は共同研究者の太田で、学習グループは1組と2組との37名、3組と4組との36名の2グループで合計73名

である。題材の目標，評価規準，授業の展開はそれぞれ表4，表5，表6のとおりである。

表4 題材の目標

(1) ファルセットに関心を持ち，体験をとおして理解を深めようとする。【音楽への関心・意欲・態度】
(2) ファルセットについて理解を深め，その特徴や雰囲気を感じながら歌うことができる。【音楽表現の創意工夫】
(3) ファルセットによる声色を知覚し，その特徴を感じながら聴くことができる。【鑑賞の能力】

表5 評価規準

1 音楽の関心・意欲・態度	2 音楽表現の創意工夫	3 音楽表現の技能	4 鑑賞の能力
ア. ファルセットに関心を持ち，どのような発声方法なのか理解しようとしている。 イ. ファルセットを実際に体験してみようと積極的に取り組んでいる。	ア. ファルセットについて理解を深め，その特徴や雰囲気を感じながら歌うことができる。	/	ア. ファルセットによる声色を知覚し，その特徴を感じながら聴くことができる。

表6 授業の展開（全2時）

時間	主な学習内容	指導上の留意点	評価の観点
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒット曲はなぜ繰り返し聴きたいと思うのか思考する ・ファルセットという発声方法があることを知る ・森山直太朗が「さくら」を歌っている映像を視聴し，ファルセットで歌われている箇所とそうではない箇所とを判別する ・地声で歌っている箇所をファルセットで歌うと聴き手にどのような印象を与えるか聴き比べてみる ・「Forever Love」（歌：X JAPAN）サビの高声域をToshiが地声で歌っている映像と，授業者が準備したファルセットで歌われた映像との2種類を視聴する ・各自受けた印象をワークシートに記入する ・「さくら」が歌われてきた場面を想像し，なぜファルセットで歌われるのか考えてみる ・「さくら」（歌：森山直太朗）のサビの高声域を森山直太朗がファルセットで歌っている映像と，授業者が準備したファルセットで歌われた映像との2種類を視聴する ・歌詞とファルセットの声質との結びつきを考える ・聴き比べた，それぞれの印象を発言する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ファルセットがどのような発声か理解して聴くために，教師が歌ってみる。 ・映像を見せる。 ・気持ちに関する言葉を机間指導から抽出し，事例として板書する。「熱くなる」「興奮する」「おだやかな気持ちになる」「落ち着く」「やさしさ」などを提示する ・卒業式など別れの場面ではどのような気持ちになるのか質問を投げかけ，生徒に聴き取って欲しい声色の違いを意識付ける ・ファルセットにはどのような効果があるのか，生徒の考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・1-ア【態度・観察】 ・4-ア【ワークシート・発言】
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜の歌詞にファルセットが使われている部分をマークしながら音取りをする ・各自マークした箇所の発声をファルセットに変化させて歌ってみる ・ファルセットを取り入れ全員で歌う ・ヒット曲でファルセットが用いられているその他の歌を聴き，それぞれどういう気持ちのときに聴いてきた歌なのか自分の生活を振り返り学習をまとめる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・1-イ【態度・態度】 ・2-ア【歌唱・発言】

本研究でファルセットに着目する理由は，ヒット曲で使用される場合は聴き手に何らかの質的な「曲想」を抱かせることを意図していると捉えているからである。具体的な着目点は，最高音をファルセットで歌う箇所である。授業

の構成は「表6 授業の展開」のとおり、ファルセットの発声による「声色」を要素に設定した展開である。その展開では「要素」として扱うファルセットによる声色を知覚するため、ファルセットと地声とを比較聴取する方法を採った。高声域を地声で歌っている「Forever Love」とファルセットで歌っている「さくら」である。「Forever Love」のファルセット、「さくら」の地声のものは、本学大学院生のAさん（男性）に比較用として歌ってもらい撮影した映像を授業で使用した。

4 結果

2時限の授業後に実施したアンケート調査項目（表7）の回答結果は図1のとおりである。

表7 アンケート調査の質問項目

質問1：意識	これまでヒット曲を聴くとき、ファルセットを意識して聴いていましたか？
質問2：判別	ファルセットと地声との違いを聴き分けることはできましたか？
質問3：歌詞との関係	ファルセットで歌う箇所と歌詞の内容との関係について考えられましたか？
質問4：思考・判断	ファルセットで歌う箇所をどう歌ったらよいかイメージを持ってましたか？
質問5：学習充足感	今後の生活でヒット曲を聴くときや歌うときにファルセットを意識できそうですか？

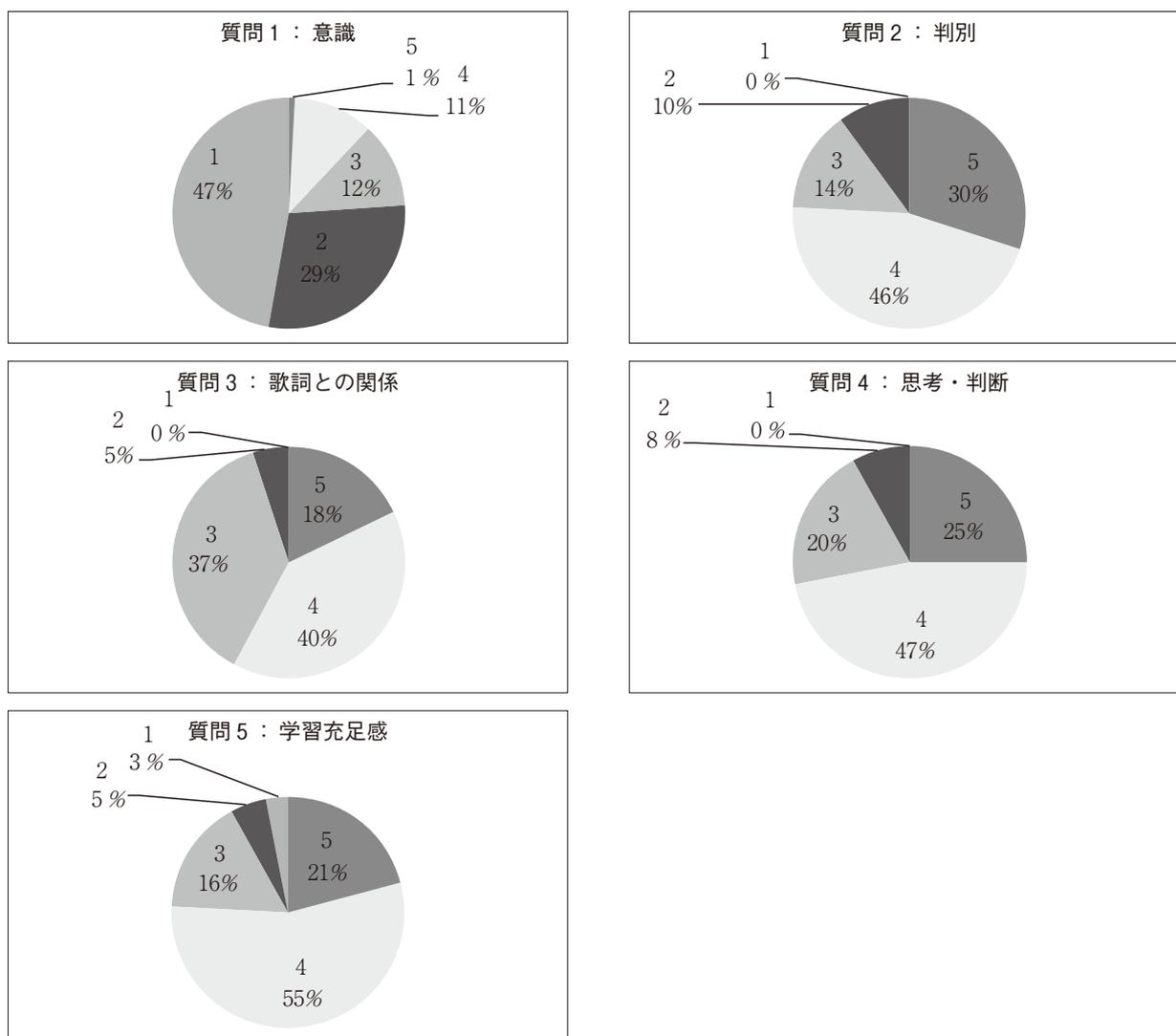


図1 アンケート調査の回答結果

また、図1の結果から「学習充足感」の割合に影響を与えた要因を分析した結果が表8である。

表8 アンケート調査の重回帰分析結果

回帰統計	
重相関 R	0.528874
重決定 R ²	0.279708
補正 R ²	0.237338
標準誤差	0.792835
観測数	73

分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	4	16.59857	4.149643	6.601544	0.00015
残差	68	42.74389	0.628587		
合計	72	59.34247			

	係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
切片	1.785101	0.56086	3.182794	0.0022	0.665923	2.90428	0.665923	2.90428
意識	-0.09586	0.088374	-1.08474	0.281869	-0.27221	0.080485	-0.27221	0.080485
判別	0.074646	0.119476	0.624779	0.534207	-0.16376	0.313058	-0.16376	0.313058
歌詞との関係	0.001244	0.126109	0.009865	0.992158	-0.2504	0.252891	-0.2504	0.252891
思考・判断	0.502209	0.133351	3.76606	0.000349	0.236111	0.768307	0.236111	0.768307

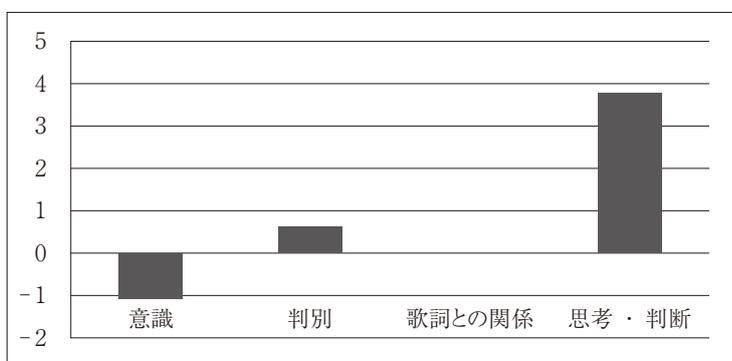


図2 学習充足感に対する影響度 (t 値)

分析から目的変数「学習充足感」に最も影響を与えているのは「思考・判断」という結果が導かれた。(図2)

5 考察

5.1 「仕掛け」の認識

西園によると音楽学習の教科内容構成の柱は、次の4側面とされている。すなわち、①「かたち」音楽の形式的側面（音楽の諸要素とその組織）、②「なかみ」音楽の内容的側面（曲想・雰囲気・特質・イメージ・感情）、③「背景」音楽の文化的側面（風土・文化・歴史）、④「技能」音楽の技能的側面（声や楽器の表現技能、合唱や合奏の表現技能、読譜等の知識・理解、批評の技能）である。そして、表現と鑑賞の「活動」によって、対象とする音楽の「何を」内容として「認識」させ、学力を育成するのか、という指導内容となっている。⁽¹⁹⁾

この指導内容に沿うと、「ヒット曲」の「ファルセットによって歌われる声質」をもう一度聴きたくなる「仕掛

け」として知覚し、その歌い手の特性を感受する感性を育成する、という構造が成り立つ。

アンケート調査結果の質問1では、「ファルセット」を意識して聴いていた回答群が「5」～「3」を合計しても24%しかいない。これは普段からヒット曲を如何に無意識な状態で耳にしているかという表れだと言えないだろうか。しかし、授業での比較聴取によって「ファルセット」と「地声」とを判別できる、との回答群が「5」～「3」の合計で90%と意識化への効果があったことが分かる。

質問6の自由記述欄には「今まではファルセットという言葉も知らなかった」(1組)、「今までは意識して聴いていなかったのですが、これからは意識して聴くと思う」(2組)、「普段なんとなく聴いている曲にもファルセットが存在していることを知った」(4組)と今回の授業で無意識に耳に入ってきていた「声」という「仕掛け」の存在に気付いたことが分かる。また「地声とファルセットは全然印象が違と思った」(1組)、「ファルセットを意識して聴くと、全く違う曲に聴こえて驚いた」(1組)、「ファルセットと地声を使い分けることで、同じ曲でも印象を変えられる」(2組)、「ファルセットで歌う方が綺麗だと思った。音程が高いから歌うのは大変だと思った」(2組)、「ファルセットを使った時と使わなかった時の聴く側の捉え方の違いを考えることが出来た」(4組)、と声色の判別が「全く違う曲」「印象を変えられる」や「ファルセットで歌う方が綺麗」とファルセットという要素の知覚が曲全体の性質を感受する記述へと感性の深まりが表れている。その他にも「ファルセットがあると、優しい気持ちになり、引きつけられるような感じがした」(1組)、「今までファルセットが使われている曲を『綺麗な曲』、『声が高い』などといった感情しか無かったが、今回ファルセットを学び、意識して聴いてみると、より感動したり、歌っている人の想いが伝わってきそうな気がしました。サビに多く使われているのかなと思いました」(2組)、などがある。

5. 2 ファルセットで歌われるニーズの質的探求

ファルセットが聴き手にもたらす印象については、授業で聴き比べをした後の生徒の発言に表れていた。生徒の発言の中で目についたファルセットを形容する言葉は、「綺麗」「やわらかい」「優しい」「穏やか」、といった躍動感を激しく感じる曲や聴いて興奮する曲とは対峙する概念で占められていた。質問6の記述においても「ファルセットがあると、優しい気持ちになり、引きつけられるような感じがした」(1組)、「高い音も裏声になると綺麗で、やわらかくて聴きやすいと感じた」(3組)、「ファルセットは、やわらかいバラード曲に多いのではないかと思った」(3組)、「ファルセットを使っている曲は、優しくておだやかな印象を受けた。曲の中で目立たせたい所に使われているのではないかと思った」(3組)、「声の綺麗さが全然違と思った」(4組)、「ファルセットの部分の歌詞は頭に残りやすいと思った」(4組)、とあった。

次の着目は「バラード曲に多い」「目立たせたい所に使われている」「頭に残りやすい」といった記述である。これは授業中に表3の曲を聴いた後に印象が強化されたものと考えられる。なぜファルセットが使われるのか、それほどのような雰囲気曲で使われるのか、というニーズに関する意識が生じたことが分かる。

授業ではニーズについて思考する際に「さくら」がどのような場面で歌われてきたのか、歌詞を読みながらそのときどのような感情で歌ってきたのか授業者が生徒に問いかけた。積極的な発言はなかったが、授業者が「卒業式のときに“やっと、あいつの顔を見なくてすむ。うれしい!”と思いながら歌う歌でしょうか。どうかな?”という問いかけをしたところ笑いが起こり「それは違う」とようやく発言が出てきた。何人かの発言から「同じクラスで過ごしてきた期間を気持ち穏やかに振り返りながら、将来に向かって進んで行こう」という共通認識を持つに至った。生徒はその認識を基に森山直太朗のファルセットが聴き手に与える印象を考察した。

5. 3 音楽的思考と判断

そこで、「さくら」を歌う際の感情をファルセットでどう歌うか思考・判断し、自らが歌う場面を設けたのが表6の第2時である。実際に教師のギター伴奏(G-dur)に合わせて歌ってみた。ファルセットは殆どの生徒が普段使用しない発声であるため、技能的に困難のある生徒もいた。アンケート調査の質問3の回答で「3」の比率が37%と質問2、質問4に比べ高い結果である。この結果は、自らの歌い手としての印象と聴き手としての印象との間に隔たりがあるということであろうか。

質問6の記述では「その曲の歌詞や曲調によって、地声とファルセットを使い分けているのだと知ることができた」(1組)、「実際に歌ってみて、ファルセットは難しいと思った。ヒットするには、それなりの理由があることが分かった」(2組)、「綺麗に聴こえるが、実際にファルセットで歌うのは、とても難しいと感じた」(3組)、「ファルセットで歌うのは恥ずかしかったけど、楽しかった。地声とファルセットを使いこなせるようにしたい」(4組)、と歌詞をどう理解し歌に反映するかということよりも、ファルセットという技能への意識が強い記述が目立った。

しかし、質問5「学習充足感」に最も影響を与えているのが「思考・判断」という結果からも、技能的側面より思

考・判断する場面の設定の方が生徒にとって知覚・感受する「学び」につながったと言えるのではないか。

6 まとめ

本研究での授業構成は生徒の技能の高まりよりも、日常生活で何気に聴いている音楽がどのような構造のもとに自身の心に働きかけてくるのか、その「仕掛け」を認識する過程で思考・判断する場面を重視し計画した。音楽について思考する過程が、ヒット曲など音楽を消費する際や自身の表現意欲や嗜好の判断など感情を伴う場面で生きる感性を養っているのではないか。すなわち、生徒にファルセットというすでに耳にしたことのある「要素」を強く意識させるために、授業の展開に「思考・判断」する場面を導入することが、生徒の感性の高まりにつながったということである。

最後に、これまで歌唱指導では変声期の中学生に対する心理的な配慮が見受けられてきたが、変声期後の高校生の場合は逆に高声域をファルセットで積極的に歌ってみる可能性を提案できたのではないかと捉えている。この意味でヒット曲には高校生の「感性」を高める教材の可能性がまだまだ秘められているのではないかと結論付けられる。

注

- 1) 増田は1970年代から1990年代までのヒット曲が収録されている『青春歌年鑑』シリーズの630曲について、次のように批評している。アメリカン・ポップスやディスコの影響を色濃く受けたこれらのサウンドからは、「歌」と「演奏」の拮抗が聞こえてくる、79年のゴダイゴ、80年のYMOによって、歌は音楽テキスト全体の中に溶解するようなアンビエンスを獲得する、としている。すなわち、歌い手の声質がサウンドの一部と捉えられる「歌」が勃興してきた時代と言える。
増田聡 (2006) 『聴衆をつくる』青土社, pp.98-99
- 2) 高橋は昭和33年告示の小学校学習指導要領で登場した「頭声的発声」が、具体的にどのような声を児童生徒に求めるべきか混乱を招いてきたことを問題提起している。特に「ファルセット」が日本音楽に由来する「裏声」と同義に扱われるなど発声用語の概念が曖昧であることを指摘している。
高橋雅子 (2009a) 「発声用語の研究 (1) - 声区に関する発声用語の概念規定を中心に -」『山口大学教育学部研究論叢 (第3部) 研究論叢. 芸術・体育・教育・心理 第58巻』山口大学, pp.149-163
高橋雅子 (2009b) 「発声用語の研究 (2) - ファルセットの概念規定及び訳語の変遷を中心に -」『山口大学教育学部研究論叢 (第3部) 研究論叢. 芸術・体育・教育・心理 第58巻』山口大学, pp.165-179

引用文献

- (1) 文部科学省 (2009a) 『高等学校学習指導要領解説 芸術 (音楽 美術 工芸 書道) 編 音楽編 美術編』教育出版, p.11
- (2) S.K.ランガー (1967) 『芸術とは何か』岩波新書, p.85
- (3) 文部科学省 (2009b) 『高等学校学習指導要領 平成21年3月告示』 p.98
- (4) 朝日新聞朝刊 (1993.7.1) 『高校教科書柔らか変身 (メディア)』 p.29
- (5) 拙論 (2014) 「歌唱教材としてのヒット曲に潜む男女観 - 高等学校教科書掲載曲の歌詞傾向」『上越教育大学研究紀要第33巻』上越教育大学, p.237
- (6) 文部科学省 (2009b), 前掲書, p.98
- (7) 渡邊健一 (1995) 『音楽の正体』ヤマハ
- (8) 山下邦彦 (2000) 『楯円のガイコツ「小室哲也の自意識」×「坂本龍一の無意識」』太田出版
- (9) 渡邊健一 (1995), 前掲書, pp.35-37
- (10) 増田聡 (2006) 『聴衆をつくる』青土社, p.99
- (11) Frith, Simon (1996) *Performing Rites: On the Value of Popular Music*, Cambridge (US): Harvard University Press, p.159
- (12) 増田聡 (2006), 前掲書, pp.102-103
- (13) 高橋雅子 (2009) 「発声用語の研究 (2) - ファルセットの概念規定及び訳語の変遷を中心に -」『山口大学教育学部研究論叢 (第3部) 研究論叢. 芸術・体育・教育・心理 第58巻』山口大学, p.174
- (14) 高橋雅子 (2009), 前掲書, p.171
- (15) 大城康宏 (1995) 「声楽発声法 - 発声訓練におけるファルセットの頭声化について -」『信州大学教育学部紀要 第84号』信州大学, p.83
- (16) 大城康宏 (1995), 前掲書, p.84

- (17) 下中邦彦 (1982) 『音楽大辞典 第4巻』平凡社, p.2055
- (18) 森山直太朗 (2003) DVD 『永遠はオルゴールの中に』ユニバーサルミュージック
- (19) 西園芳信 (2009) 『中学校音楽科の授業と学力育成－生成の原理による授業デザイナー』廣済堂あかつき, pp.28-29

Sensitivity of the high school student to feed by hit songs as teaching materials : Perception of the tone by falsetto and reception by “the device”

Yûji OZAKI* · Aki ÔTA**

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify a learning process that how is “the sensitivity” of the high school student developed by musical factor of a hit songs placed in the textbook. A revision high school course of study was applied by the student who entered it in 2013. By the class of songs in art subject <music> of the high school, the learning process that expressed the internal experience of students was specified. And the perception of “the element” was specified in fourth items when “students perceived an element and received those work”.

Therefore the writers practiced the class that introduced hit songs that a falsetto was used for into a song teaching materials. Falsetto to be used in hit songs gives an impression to relax mentally, “calm” or “warm” to a person listening to the song. As a result, when I introduce a scene performing “a thought, a judgment” into the development of the class, the students were strongly conscious of a falsetto, the students were strongly conscious of a falsetto, and the writers were able to make clear that the sensitivity of the student increased.